

グラフィーティ
予備校graffiti

— 私が出会った青春（五） —

目次

ページ

・ ㉔ K君の三つの「旅」	2
《PART・Ⅰ》お祖母さんに導かれての、故郷土佐への旅	3
— 「駐在保健婦制」を追って —	
《PART・Ⅱ》宮本常一に導かれての、日本人への旅	4
— 「忘れられた日本人」を追って—	
《PART・Ⅲ》大江満雄に導かれての、ハンセン病への旅	6
— 「ハンセン病」患者との出会い —	
・ ㉕ D君の戦利品、その苦い味	12
・ ㉖ 辛い思い出 — 「落とし穴」に嵌 ^は まった若者たち—	14
(A) 「パチンコ3兄弟」	14
(B) 「だって、私、彼氏が出来たんですよ！」	16
(C) 「困るんです。こういうの、本当に困るんです！」	17
(D) 「お陰様で、30歳で1千万です！」	19
(E) 「僕、一応、ドストは制覇しました」	22
・ ㉗ クリスマス、I君が「暗唱」したもの	25
・ ㉘ Hさん、無限の情熱と生命力の向かうところ	27
・ 予備校 graffiti・㉔～㉘・余録	31
・ 予備校 graffiti・もう一つの「青春」 ⑤	33

予備校 graffiti・㊹

K君の三つの「旅」

はじめに

今回はいつもよりスペースを多く取り、K君が今まで歩んできた道について、三つの「旅」に分けて記したいと思います。これらから我々が学ばされることは少なくないでしょう。

K君は私が週一回担当をしていた高三クラスの生徒さんでした。頭脳の聡明さと性格の明るさに加えて、彼が私に強い印象を与えたのは、その年（1989）浪人生を対象として八回にわたり開かれた「エンリッチ講座 ―ドストエフスキ『夏象冬記』を読む―」に、高校生としてただ一人、ほぼ全回出席をし、講義後の質疑応答でも積極的に発言を繰り返したことでした。群を抜いて生命力に溢れた高校生だったのです。

1989年とはフランス革命から200年、様々な点で現代史の大転換点だったと言えるでしょう。ドストエフスキの国ソビエトでは、1980年代半ばからゴルバチョフ大統領による改革（ペレストロイカ）が進み、1986年にはこれと逆呼応するかのように、チェルノヴィリ原発事故という大惨事が生じ、1991年には遂にソビエト連邦が崩壊してしまいます。この流れの中で1989年、中国では天安門事件、ドイツではベルリンの壁の撤去、日本では昭和天皇の死去などが立て続けに起き、世界の現代史が大きく塗り替えられてゆきました。“Japan as No.1”というような標語に浮かれていた日本では、昭和天皇の死去を合図とするかのように、いよいよバブル景気が崩壊に向かい、現在に至る衰退が始まったのです。

このような内外の激動期にあって、多くの河合塾生もまた若い心を震わせ、世界に目と心を開き、翻って祖国日本を冷静に見つめようと、競ってエンリッチ講座に集ったのでした。この講座で扱った『夏象冬記』とは、1862年、ロンドンとパリという当時世界最大の都会を訪れたドストエフスキが、西欧社会とは何であるのか、そこを支配する精神とは何であるのかについて正面から考察をし、痛烈な批判と弾劾を投げかけた旅行記です。私はこれがドストエフスキを理解する上で、また彼を介して西欧と日本を理解する上で、若者たちに格好の書物だと考えたのでした。そしてこの『夏象冬記』を、浪人生に交じって読み通した唯一の高校生がK君だったのです。（この講座については、「ドストエフスキ研究会便り（2）」も参照して下さい）

K君についてお伝えしたいことは数多いのですが、始めに記したように、今回はK君が続けてきた三つの「旅」に的を絞りたいと思います。第一はお祖母さんに導かれての、「駐在保健婦制」の歴史を辿る旅。第二は宮本常一に導かれての、宮本民俗学の足跡を辿る旅。言い換えれば「忘れられた日本人」を求める旅。最後は詩人・

大江満雄に導かれての、ハンセン病との出会いの旅。より正確にはハンセン病元患者の人々との出会いを求める旅、彼らがその痛みと苦悩の底から如何なる言葉、「詩」を生み出したかを辿る旅です —— これら三つの旅に沿って、K君が如何なる思索を進めてきたのか、確認をしてゆきましょう。

三つの旅の紹介は、紙面の都合上、駆け足のデッサン程度にしか出来ません。しかしこれだけでも既に我々は、K君に導かれ、人間と世界と歴史について少なからぬ思索を促されることでしょう。私の説明が不十分な点は、三つの旅とそのテーマごとに彼の著作を紹介しておきます。あとは皆さん自身が、それらの著作に沿ってK君と共に旅をし、彼との「対話」を試みて欲しいと思います。

この「予備校 graffiti」に紹介する人たちの氏名は、原則としてイニシャルで記しています。しかし第三回目のO君やS君のように、その仕事が既に広く社会的に認知されている場合は、その著作名やテレビへの出演番組などは、そのまま記しています。今回のK君の場合も著作は数多く、その仕事は社会的な認知度も高く、また皆さんにも広く知って頂きたいので、氏名はイニシャルで記しますが、著作名や出版社名等はそのまま紹介しておきます。あとは皆さんが、K君と直接向き合ってください。

《PART・I》 お祖母さんに導かれての、故郷土佐への旅

—「駐在保健婦制」を追って—

★まず「駐在保健婦制」の歴史を辿る旅です。「駐在保健婦制」——我々には余り馴染みのない名前ですが、これは日本が太平洋戦争中、日本国民の健康を増進させ、ひいては祖国の勝利に向け、国民の体力増強を図るべく創設された制度です(1942)。かつて「駐在」のお巡りさんが国内の治安維持にあたり、現在は「交番・Koban」として市民生活の安全維持に大きな役割を果たしているように、「駐在」の保健婦さんは、全国各地で劣悪な衛生状態の改善や国民の健康意識を高めるべく努め、その後の法改正の結果、今では各地方自治体が管轄する「保健所」の保健師さんとなったと言えば、ラフな説明ですが、大まかなイメージは掴めるでしょう。

K君は故郷の四国高知県(宿毛)で、お祖母さんが「駐在保健婦」として働いていたことから、このお祖母さんにインタビューを重ね、この制度を卒業論文から修士論文、更には博士論文へと一貫して追い続け、高知県における「駐在保健婦制」のユニークな展開を歴史的に位置づけ、この角度からの見事な日本近代史を書き上げたのです。歴史ないし歴史学に関心のある人には、格好の指標となるでしょう。

『駐在保健婦の時代 1942-1997』、医学書院、2012

★K君がお祖母さんとの間に続けた「^{インタビュー}聞き書き」。ここから生き活きと伝わってくるのは、まずはお祖母さんの人間味と善意に溢れた性格とその仕事ぶりです。またここ

から我々が教えられるのは、「駐在保健婦制」が、日本の戦時体制補完の役割を果たすという問題を孕みながらも、保健婦さんの人格を介することで、国民の身体と心の健康にとって如何に有益な実りをもたらす制度であり得たかということです。

何よりも私の心を引きつけるのは、お祖母さんと向き合い、人間と向き合い、そして社会と歴史と向き合い、結局は庶民の持つ無限の可能性に目と心に向けるK君の、厳しくも温かい姿勢です。後に紹介しますが、彼の宮本民俗学とハンセン病との取り組みから浮かび上がるのは、アカデミズムの世界で見られる、ともすれば人間が捨象された歴史理論の構築とは遠く離れた、「庶民」の血が息づく歴史世界の構築だと言えるでしょうが、それを用意したものとは、何よりもまず故郷土佐でのお祖母さんとの出会いと、このお祖母さんと孫との間に繰り広げられた「聞き取り」、つまりは濃密な人間的「対話」だったことを強調したいと思います。是非皆さんも『駐在保健婦の時代 1942-1997』で、このお祖母さんと孫との「対話」そのものを味わって頂きたいと思います。彼が故郷土佐に対して抱く愛と誇りについては、改めて最後に記しましょう。

《PART・2》宮本常一に導かれての、日本人への旅

—「忘れられた日本人」を追って—

★次は宮本常一の足跡を訪ねる旅です。K君は高校一年生の時、岩波書店のPR誌『図書』で、司馬遼太郎が推薦する「私の三冊」から、宮本常一の『忘れられた日本人』のことを知ります（未来社、1960。現在は岩波文庫にも収められています）。彼が実際にこの本を読んだのは、大学入学直前に帰郷した時のことでした。歴史の表舞台には決して登場しない「忘れられた日本人」が語る生の記録に、また支配者や英雄豪傑ではなく、ひたすら庶民に眼を据える宮本の視線に、この時K君は「心が震えた」と言います。高校三年生の頃のK君について、そしてお祖母さんとの対話については先に記しました。既に人間と世界と歴史について目と心を大きく開かれ、また故郷土佐をこよなく愛するこの青年の心に、新たに宮本民俗学の世界が飛び込み、その心を震わせたことは、決して偶然のことではなかったのです。

★K君によると、当時は宮本常一に注目する人は少なく、直接自分自身で宮本の著作とぶつかる以外に、宮本民俗学について知る手段はなかったそうです。そこで彼が始めたこととは、大学にある宮本の著作全巻を読破するという作業でした。三年半にわたる宮本世界との取り組み。途中K君の心には、宮本の次のような言葉が響いてきたと言います。

「歩いてみろ。旅はええぞ」

宮本の本を読み続け、とうとう最後の一巻を閉じた時のことです。K君の心の内から湧き上がってきたのは、今度は彼自身の言葉でした。

「よし、今度は旅だ」

★「あるく・みる・きく」—— 宮本常一の呼び声に応えて、また宮本の言葉を杖として、そして故郷のお祖母さんとの対話と並行して、K君の新しい旅が始まります。

1. 移動手段としては普通列車にしか乗らない。
2. 食事はなるべく質素に。
3. 宿代を浮かすために寝袋で野宿。

儉約の旅のため、K君はこれら三つの鉄則を自らに厳しく課したのです。このようなところに「草の根歴史学」とも言うべきものを打ち立てつつある、彼の庶民性が窺い知られると思います。私はこのエピソードが大好きです。

★「忘れられた」名もなき庶民を求め、日本中を旅して歩いた宮本常一。敬愛するこの宮本の足跡を追い、また宮本が歩けなかった土地とそこの人々をも訪ね、日本中を旅して歩いたK君は、その十数年にわたる旅の記録を二冊の本に纏め上げ、それらは既に出版もされています。宮本とK君。これら世代を隔てた二人の旅人が、名もなき庶民の内に息づく生の脈動を生き活きと掬い取り、そして人間が持つ理屈抜きの善良さと素晴らしさを確かな言葉で刻印する筆は、我々の心を揺り動かさずにはいません。是非皆さんも直接手に取って、これらの一読をお勧めします。

『「忘れられた日本人」の舞台を旅する 宮本常一の軌跡』(河出書房新社、2006)

『宮本常一を旅する』(河出書房新社、2018)

★ここで暫くドストエフスキイの『罪と罰』に目を向けてみたいと思います。この作品の主人公ラスコーリニコフを苦しめるのは、恐るべき一連の問いです —— 世界とその歴史を支配するのは少数の権力者たち、つまり「ナポレオン」たちと、その恣意的な暴虐でしかないのではないか？ あのナポレオンの恣意の下に、何万何十万という兵士や庶民が意味もなく次々と殺されていった。ところがこの恐るべき悲劇を次々と生み出しながら、当の本人は平然としているではないか。世界とその歴史とは、このナポレオンのような権力者たちの恣意的な支配・暴力によって、名もなき罪なき庶民たちがただの「素材」として消費される場でしかないのではないか？ では果たして、この自分は「ナポレオン」なのか？ 或いはただの素材、「一匹の虱」でしかないのか？ —— 内から湧き上がるこれらの問いに突き動かされ、

青年は自らが「ナポレオンか、虱か？」を確かめるべく、遂に金貸しの老婆殺害という「一線の踏み越え」、悪魔道に踏み込んでゆくのです。

★宮本常一が、そしてその足跡を辿るK君が我々を導くのは、これとは対極的な人間と世界と歴史に対する視線です。人間と世界と歴史を作り上げるのは、決してナポレオンのような英雄・豪傑や、強大な武力と権力を握る少数の者たちではない。むしろ「忘れられた」名もなき大多数の庶民たちこそが、そして彼らの内に蔵された善良さこそが、世界とその歴史を根底から支え動かす真の力である——ナポレオンに目を釘付けにされたラスコーリニコフが、「一匹の虱」として憐れみ、蔑んだ庶民の存在、この「忘れられた」名もなき庶民の内に脈々と流れる生命力と知恵と創意、そして底なしの善意について、宮本常一とK君二人の旅は我々の眼と心を素直に開かせてくれるのです。「保健駐在婦」を巡り彼がお祖母さんと交わした対話、そして宮本常一とK君との対話に触れる時、皆さんは人間が持つ否定面のみに目をやり、それを悲しみ思い悩む前に、まずは自分が生きてあること、「庶民」であることを素直に喜び、そして誇りたくなるに違いありません。

★なおドストエフスキイですが、この作家はラスコーリニコフを描いたのみではありません。彼はその一方で、この青年を悲劇的悪魔道から引き戻し、その魂が負った深い傷を癒す女性ソーニャを描く作家、つまりロシア民衆の魂の内に生き、彼らが信と愛を捧げるイエス・キリストを描き、そのイエスを「命」として生きる人々を描く作家でもあるのです。その延長線上に、我々が前回まで繰り返し取り上げてきた『カラマーゾフの兄弟』のゾシマ長老や、その弟子アリョーシャの存在があることも付け加えておきたいと思います。K君が示す問題は、ドストエフスキイ世界と重ねる時、更に深い層を現わし出すことに注目すべきでしょう。

★ところで「庶民」とは本当に、ソーニャのような絶対肯定の存在としてのみあるのか？ 彼らの内には、実は恐るべき悪魔性も潜んでいるのではないのか？——K君は「庶民」について、新たに大きな困難とぶつかります。それが次に取り上げる彼の三つ目の旅、ハンセン病との出会いの旅です。ここでK君はハンセン病とその患者・元患者の人々に対して、長い間日本政府と「庶民」の大多数が示し続けてきた偏見と差別と迫害、その悪魔性と直面することになるのです。

《PART・3》 大江満雄に導かれての、ハンセン病への旅

—「ハンセン病」患者との出会い—

★K君が続けてきた、そして今も続けるもう一つの旅、広い意味で「ハンセン病との出会いの旅」について記す前に、今年2019年という年が、日本におけるハンセ

ン病の歴史の中で、大きな転換点となった年であることを確認しておきましょう。

ハンセン病（癩病）は人類の歴史とほぼ並行して昔から知られた病で、その感染力は弱いものの、見るも痛ましい症状を呈する場合があります、このことが人々を過度に恐れさせ、様々な形で患者の人たちを偏見と差別と迫害の対象としてしまったのです。殊に近世以降は、医学の進歩と共に高まった「衛生意識」が、皮肉にも、人々をしてこの病気を必要以上に恐れさせ忌み嫌わせ、患者さんたちを社会から「強制隔離」の形で追放させてしまったのです。近代日本においても明治政府による、「癩予防ニ関スル件」の公布（1907）から始まって、過酷な「癩病対策」が様々に取られ続けました。太平洋戦争が終わった後でさえ、政府は以前にも増して厳しい「らい予防法」を制定し（1953）、つい最近（1996）の同法の廃止に至るまで、「隔離」と「断種」と「懲罰」という非人道的な政策を取り続けたのです。

政府ばかりではありません。国民の大部分もまた、この病に対する強い偏見と差別意識に囚われ、患者の人たちのみならず、その肉親親族に至るまで、社会から葬り去ってしまっていたのです。2001年の「らい予防法」国家賠償訴訟の勝訴に続き、熊本地裁においてハンセン病家族国家賠償訴訟の勝訴が確定したのは正に今年、2019年6月のことです。この判決に対して、政府が控訴を断念し、首相が患者の人たちやその家族の人たちに陳謝したことがマスコミに取り上げられたことは、皆さんの記憶に新しいと思います。

この問題について関心の低い人に対しては、東京の東村山市にある国立ハンセン病資料館に足を運ばれることをお勧めします（K君は一昨年、この学芸員に就任しました）。またこの問題が大きなテーマとして扱われる映画としては、日本では『砂の器』（野村芳太郎監督、1974）や、イタリアでは『神の道化師 フランチェスコ』（R.ロッセリーニ監督、1950）をお勧めします。それぞれ胸に迫るものがあるでしょう。

★K君の第三の旅。それは人間の無知と偏見、その悪魔性が生んだ最も残酷な悲劇の一つ、ハンセン病に関わる「闇と光」を辿る旅です。K君の旅はまず、この病に罹った庶民が、そしてその家族親族が如何に悲惨な生を強いられてきたか、その痛みと苦しみを知る旅であり、それは他ならず、この痛みと苦しみを強いるのが同じ庶民に他ならないという現実を直視する旅でもあったと言えるでしょう。彼にとってハンセン病との出会いの旅は、既にお祖母さんとの対話の内に始まるものであり、また宮本常一の足跡を追う旅とも無関係ではありませんでした。つまり三つの旅は、ハンセン病を介して彼の内で互いに深く結びつき、人間と世界と歴史が持つ「闇と光」について考える上で、不可欠の一体をなしていたのです。

★K君の具体的な生活史に戻りましょう。大学院への進学に当たり、K君はそれま

で学んでいた国立大学から、神奈川大学の網野善彦教授の下での研究を目指すこととなります。周知の如く網野教授とは、中世日本史に新たに鋭い光を投げかけ、「網野史学」と呼ばれる歴史学の新しい流れを築いた方で、河合塾のエンリッチ講座にも来て下さり、その講演記録も出版されています（『海から見た日本史像：奥能登地域と時国家を中心として』河合文化教育研究所、1994）。

大学院入試の面接の場でK君は、ハンセン病の問題への強い関心を表明します。この病の悲惨さについて、殊に高知県におけるこの病の多さについては、既にお祖母さんから語り聞かされ、彼の問題意識の内深くに捉えられていたのです。このK君に対して、試験官の網野善彦教授から暖かい励ましの言葉が返されます。ここに新たな旅が開始されたのです。

★K君が属することになった歴史民俗資料学研究科。そこで進められる堅実な「文献史学」と柔軟な「フィールドワーク」。これらが生来開かれたK君の心と頭を更に刺激し、一層自由で厳しい批判的思考を育み鍛えていったと言えるでしょう。

この態勢の下、二十代後半から三十代にかけてのK君は、ひたすら今まで記してきた三つの旅に明け暮れる日々でした。彼が初めて正式な職（上述）に就いたのはごく最近、四十代半ばのことです。

★ハンセン病と向き合うK君について、語るべきことは実に多くあります。しかしここで記すべきは彼の三つ目の旅、ハンセン病を追う旅が、彼と同じ故郷土佐出身の詩人・大江満雄と出会い、この詩人の導きによって開始されたということでしょう。大江満雄はハンセン病に罹った人たちが国家によって強制収容をされた全国の施設を訪ね歩き、その人たちの苦痛と苦しみに寄り添うと共に、彼らから生み出される詩的言語世界の素晴らしさに着目し、その詩作活動を励まし、指導を続けた人です。『大江満雄集』の編集に加わったK君は、改めて自らの足でこの「詩人」たちを日本各地に訪ね歩き、「聞き書き」の作業を開始したのです。

★「聞き書き」の旅 —— お祖母さんと宮本常一に導かれて続けた旅もそうですが、これこそがK君の「草の根歴史学」の真骨頂であり、彼の思索を具体的で明晰なものにし、かつ我々に様々な問題を提起する源泉となっていると言えるでしょう。私は殊にハンセン病の元患者さんたちとの出会いを求めて、K君が新たに踏み出した旅が、人間の魂の「闇と光」の問題という点で、K君の仕事をドストエフスキイ世界に深く結びつけることになったと考えています。最後にこのことを確認してゆきたいと思います。

★K君の新たな旅の記録。そこで我々がまず見出すのは、大江満雄に導かれたK君

の目と心が、まずはこの病に犯された人々の痛みと苦悩に寄り添う目と心であり、この人たちの痛みと苦悩から生み出された「詩」の世界に向かうものであることは先に記した通りです。K君が紹介するそれら様々な作品は、今までの二つの旅とはまた別の形で、彼が行き当たった「人間」の魂の輝きを示すものとなっています。この旅の記録も既に二冊の本となっていますから、是非皆さんはそれらで直接様々な作品と向き合い、またそれらとK君との出会いから生まれる「光」を味わって頂きたいと思います。

『大江満雄集 詩と評論』（共編、思想の科学社、1996）

『癪者^{らいしや}の憲章 大江満雄ハンセン病論集』（編、大月書店、2008）

『来者の群像 大江満雄とハンセン病療養所の詩人たち』（水平線、2017）

★さてK君の新しい旅が教えてくれるもう一つのこと。それはハンセン病の人たちに測り知れぬ痛みと苦悩をもたらした原因が、「病」そのものであると共に、それに劣らず彼らを強制的に家族から引き離し、生涯にわたる隔離幽閉生活を強いる「保健政策」を取り続けた国家とその原罪の重さであるということは、既に記しました。しかし原因はただ国家に帰されるべきではありません。ハンセン病をただただ恐れ忌み嫌い、本人ばかりか肉親親族までもを社会から排斥し、抹消さえてきた国民、即ち「忘れられた」名もなき「庶民」の内に根深く宿る偏見と差別意識という悪魔性も忘れてはなりません。つまりK君の旅は、今までの旅の延長線上にありつつ、ここで人間と世界と歴史が宿す「光」ばかりか、深い「闇」に対する厳しいリアリズムと批判精神を加え、新しい次元に至ったのです。そしてこの「光と闇」の問題こそが、彼とドストエフスキイとを結ぶものと考えられるのです。

★ここでもう一度ドストエフスキイに目を向けましょう。『カラマーゾフの兄弟』で多くの読者を引きつける存在は、世界に満ちる「罪なくして涙する幼な子」たちを指さし、この事実一つで、既に神がこの地上世界に存在する理由も資格もないと弾じる「叛逆」の思想青年イワンです。理不尽としか思われない世界の悪や不義を前に、「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」に身を震わせるイワンの内には、ラスコーリニコフと同じく、人間に対する限りない愛が脈打っているのです。

ところがこのイワンは、弟アリョーシャに語る「大審問官」の劇詩においては、これと正反対の否定的人間観を投げつける青年でもあるのです。つまり彼によれば、人間とは、底なしの信と愛を以って彼らに臨んだイエス・キリストを裏切り、十字架の上に磔殺してしまった卑劣な存在であり、自らに与えられた神に向かう自由を受け止める力も意志も持たない、弱く愚かな存在でしかないのです。

この両極的な人間観と、それらの間で分裂し苦悩するイワン。多くの読者はこ

ここに悲劇的眞実を見出し、強く魅了されるのでしょう。『カラマーゾフの兄弟』とはドストエフスキイが生涯の総決算として、「光と闇」「肯定と否定」をギリギリにまで煮詰めて対立させ、その分裂の狭間から究極の「光」「肯定」を探る作品であることが、このイワン像から明らかとなります。私はK君のハンセン病を求める旅が、新たにこのようなドストエフスキイ的「光と闇」「肯定と否定」の問題に厳しく触れるに至ったと考えています。高校三年生の頃から既に『夏象冬記』にぶつかり、大学生になるとドストエフスキイ研究会に参加した彼が、その後の長い三つの旅を経て、改めてドストエフスキイ世界に立ち戻り、新たな思索を開始したのだとも考えています。

★最後にK君が愛する大江満雄の詩「癩者の憲章」を紹介しましょう。K君自身も自らの著作の冒頭にこの詩を掲げているのですが、この詩の中には、彼が大江満雄に導かれた旅で見て感じた全てが、そして彼が今までの旅で見出すに至った「闇」を超える「光」が、人間と世界への恩讐を超えた信と愛として、見事に凝縮され表現されていると言えるでしょう。三つの旅の中で培われてきたK君の厳しいリアリズム・批判精神が、ドストエフスキイ的「光と闇」の思索を経て、更にこれから先どのような「光」に向かうのかが、ここには読み取れるように思われるのです。

癩者の憲章

大江満雄

私の中の癩者は、さけぶ。

ぼくらの肉体は崩壊してゆきます。

顔も手も足も。

これはレブラ菌の顔です。

僕の顔は不在です。

癩菌はいつのまにかぼくの肉体を侵し、

かつての面影もありません。

僕は抵抗します。

細菌の植民地化に。

ぼくは、さけびます。

「ぼくの顔を整形することはできませんか

原子爆弾でやられた少女らの顔や手足は整形されるといいます」

ぼくは憎悪の中の愛です。

癩菌よ癩民族のために栄えよと非癩者を憎しみながら、
その滅亡を、秘かに祈っている少年です。

ぼくは絶望の中の希望です。

呪も無く、ただ消え入るような嘆きから立ち上がり、
崩壊してゆく肉体の中に人格を認めよと叫んでいる少年です。

ぼくは破壊の中の建設です。

古い非人間的な法律をうちこわそうとし、
内部からのポエジイを律法化しようとしている少年です。

ぼくは死んだ言葉たちの中で生きている新しい言葉です。

虚飾な、いつわりの言葉たちにとりかこまれ、
癩者の憲章を書きつづっている未来的な少年です。

ぼくはむやみに嫌われ迫害されている親兄弟を思いながらさげんでいる少年です。

「癩菌は滅亡させなければならない

が、癩者の家庭には花束を捧げよ」と。

(十一月二十二日、癩予防法改正促進委員会の活動を思いながら)

おわりに

K君が故郷の四万十川に寄せる思いと共に、四国土佐に対する愛を熱く語ってくれたことがあります。彼によれば、土佐の人たちが東に広がる太平洋を前にして思うこととは、この遙か彼方にはアメリカという広大な大陸が横たわっているということであり、この大海原を越えて何時の日か自分はその遙か彼方の大地を踏みしめるのだという心こそ、土佐の人たちが生来持つ「気概」だと言うのです。この瞬間私の頭を、ジョン万次郎や坂本龍馬のことがよぎりました。故郷の四万十川の畔で浴びた輝かしい陽光、そして土佐人の大きく骨ある気概がK君を三つの旅に送り出したのであり、しかも彼はそれらの旅の先に、なお新たな「光」を見出す旅に向かっているのだと思わざるを得ません。

(この項 了)

予備校 graffiti ②③**D君の戦利品、その苦い味**

★D君の「気合いの入った」エピソードから入りましょう。

明治大学のD君は（今回は話の性格上、関係する大学名をそのまま記します）、大学入学後も時々私を訪ねて来てくれていたのですが、ある日顔の至る所に青アザを作り、目の周りも膨らませるという痛々しい姿で現れました。どうしたのだと聞くと、悔しそうな表情とニヤニヤ笑いとを交互に浮かべながら、事情を話してくれました。

★ラグビーが大好きなD君は、秩父宮ラグビー場で行われた伝統の早・明戦に、母校の応援をすべく出かけて行きました。ところが相手側の応援席から執拗に飛んできたのは、次のような野次だったのです。

「テメーらの偏差値で、ウチを破れるわけがネーダロー！」

試合は早稲田の勝ちでした。屈辱感に捕らわれ、また怒り心頭に達したD君は、早大生が祝勝会をあげる新宿の歌舞伎町に一人で乗り込んでゆきました。街頭で酔っ払って気炎を上げている集団を見つけると、彼はその一つに突進してゆき、格闘の末、リーダーらしき一人が振りかざしていた応援旗を奪い取って帰ったのです。

★顔をアザだらけにしたD君が予備校に現れたのは、その翌日でした。

「先生、これ！」

奪い取った応援旗を差し出し、事の顛末を話した彼に向かい、私は応えました。

「よーし！」

★戦利品を受け取った瞬間、私を支配したのは痛快な勝利感でした。しかしこの瞬間、それ以上に何とも言い現わし難い、後味の悪さが私に忍び寄ってきたのです。私は受け取った応援旗を黙って丸め、鞆に入れました。D君も黙って見つめていました。この時私はハッキリと理解しました。「この子が私の許にやって来たわけは、これだな！」——D君もまた、この後味の悪さを何とかしたかったのです。

★この「後味の悪さ」とは、一体何処から来るものなのか？ —— 私は二つのことを考えました。一つは、早大生たちの許し難い卑劣さです。彼らが露骨な野次で明大生に示した優越感。その背後には日本人の、更には広く人間の心の奥底に蟠局を巻く「差別意識」、或いは「優越意識」という醜い悪魔性が潜んでいることは明らかです。これはハンセン病に対して人々が示し続けた偏見や、差別意識とも深い所で繋がる悪魔性でしょう。その卑劣さと醜さに対しD君が復讐を果たし、それに私が快哉を叫んだこと。ここから来る「後味の悪さ」。たとえ如何なる卑劣さをぶつけられたとしても、「復讐」で決して問題は解けないのです。

★もう一つはD君がふるい、私が称讃した「力」、つまり「暴力」そのものが持つ醜悪さです。夜の歌舞伎町に乗り込み、祝勝会で盛り上がる敵軍の中に一人で飛び込み、「ボコボコ」にされながらも、相手の応援旗を奪い取って帰ったD君は英雄です。しかしD君は相手の醜い差別意識に、それと等しく醜い「暴力」を以って復讐を果たしたのです。「暴力」への報いは、底無しの「後味の悪さ」なのです。

★地上に満ちるナポレオンたちの暴虐。この現実と直面したラスコーリニコフが最終的に訴えたのは、「斧」を手にしての「老婆殺し」でした。暴力で以ってする暴力への復讐。青年をこの悪魔道から救い出すのは、ソーニャという売春婦です。「何処にも行き場のない」ソーニャは、その絶対の窮境の中で、なお隣人に「全てを与え」生きる存在です。人間に対する彼女の信と愛こそ、『カラマーゾフの兄弟』におけるゾシマ長老とアリョーシャ師弟の「実行的な愛」と共に、ドストエフスキイが我々に提示した、人間の悪魔性に対する究極の解答だと言えるでしょう。

★先のK君の話に戻り、彼をハンセン病への旅に導いてくれた大江満雄の詩「癩者の憲章」にあった表現を、改めてここに抜き出してみたいと思います —— 「憎悪の中の愛」、「絶望の中の希望」、「破壊の中の建設」・・・

人間の卑劣さや愚かさや醜さ、そして暴力。その悪魔性への究極の解答とは、大江によれば、筆舌に尽くし難い痛みや苦悩を超えて、「恩讐の彼方」に初めて生まれ出る「憎悪の中の愛」なのです。大江はそれが「癩者」＝「来者」の獲ち得た「憲章」だと謳い、K君はこの「憲章」を自らの新しい旅の杖としたのでした。

★現在ますます世界を支配しつつある「暴力」。「力」を第一とする風潮に対して、果たして我々は「憎悪の中の愛」を以って、また「絶望の中の希望」を以って、「破壊の中の建設」に着手する真の「力」とする覚悟はあるのか？ D君と私が味わった苦い体験、あの「後味の悪さ」に立って、改めて皆さんにこの問いを投げかけたいと思います。

(この項 了)

予備校 graffiti ②③

辛い思い出

—「落とし穴」に嵌まった若者たち—

★今回と次回は、私の心に今も忘れ難く留まる若者たちを、「辛い思い出」と「痛快な思い出」とに分けて書き残しておこうと思います。前者の方は今回、「落とし穴」に嵌まった若者たち」という副題を付けて、(プライバシーには最大の注意を払いながら)報告します。「落とし穴」に嵌まった —— 少々キツイ言葉を使いますが、このことで私は、この若者たちを「不注意者」だとか「落伍者」だなどと決めつけているわけではないことは、一読してお分かり頂けると思います。また「落とし穴」という言葉で、我々の人生に潜む様々な問題と危険を、どこまでの確に切り取れるのかも定かではありません。しかし屈辱感に捕らわれ怒りに駆られたD君が、「暴力を以てする復讐」という厄介な「落とし穴」に嵌まってしまったように、ここに紹介する若者たちのエピソードもまた、様々な形で、我々の人生の道程に潜む「落とし穴」を指し示してくれているように思われます。

彼らがその「落とし穴」に落ち込まぬよう、当時私は真に適切な忠告をし、行動をとってあげたのかどうか —— 今も確信を持てずにいる思い出が数多くあります。私は相手の非や誤りに気づいた時、直ちに相手を叱りつけたり、激しく対決を迫ったりするよりも、静かにそれを指摘し、彼ら自身の内からの覚醒を待つというのが生来の性向であると認識しています。しかし長い人生の間には、この限界と短所を痛感させられる場合も少なくなく、このことで常に思い悩んできたというのが実際です。ここではD君の場合と同じく、私の心に未だ「後味の悪さ」「辛い思い出」として残る幾つかの思い出を出来るだけ正確に記し、自分の言動の適否は皆さんの判断に委ねようと思います。

(A)「パチンコ3兄弟」

★或る校舎に仲よしの浪人生三人組がいました。五月の連休明けの頃です。午後の授業が始まる時、三人が教室にそそくさと駆け込んできて、ニコニコしながら教壇にチョコレートの箱を三つ置き、それぞれの座席に就きました。気前の良い明るい仲よしだな。私は微笑ましく思いました。ところが彼らが授業に遅刻することが頻繁になってきたのです。一学期の終わり近くになると、時間ギリギリに授業に飛び込んでくることは以前と同じですが、その人数は二人だけとか、一人だけというように減ってゆきました。七月初めの最終講。姿を現したのは一人だけでした。授業後、私は教室を出てゆく彼を呼び止め、他の二人はどうしたのかと問い質しました。返

ってきた言葉はこうでした。

「イヤー、出ちゃって。出ちゃって！」

彼らはパチンコに嵌まっていたのです。

受験生の天王山、夏休みが始まる直前です。私は彼に、いい加減にするようにと、また二人にもそう告げるようにと厳しく命じました。「夏が終わってから後悔しても遅いぞ!」。彼はニコニコして、ベコンと頭を下げ、教室を出てゆきました。

★二学期の最初の授業に現れたのは、夏休み前に授業に出てきたあの一人だけでした。再び彼を捕まえて問うと、答えはこうでした。

「あの二人、もともと上手かったんです。夏の間にもっと腕を上げてしまったんです。もうプロ級ですよ。止められないんです」

この三人のことは、当然クラス担当のチューターさんも一学期から把握をしていて、夏の間も厳しく声をかけ、家にも連絡をしていたのでした。しかし彼らはチューターさんから声をかけられても、一週間と我慢が出来なかったのです。模試の打ち上げだからとか、新台交換の日だからとか、雨の日はよく球が出るからとか、様々な理由をつけてパチンコ店に吸い込まれていったのです。腕がプロ並みに上達するのと反比例して、当然のこと、成績はどんどん落ちてゆきます。秋の深まりと共に、「パチンコ3兄弟」(私とチューターさんが付けた^{あだな}綽名です)は完全に予備校から姿を消してしまいました。合否はチューターさんも把握できず、今では私は彼らの綽名以外、名前も思い出せません。意志の弱さだと言えばそれまでですが、三十余年の河合塾での講師生活の中で、これは最も辛い思い出の一つです。

今も私は駅前のパチンコ店の前を通り過ぎる時、彼ら三人のことを思い出して胸が痛みます。日本中の駅前に掘られた大きな穴、意志の弱い多くの人たちを呑み込む危険な「落とし穴」——パチンコ店について、「偏見」かも知れませんが、私はこのイメージをどうしても払拭することが出来ません。

★ドストエフスキイは四十代、ルーレット賭博に嵌まり、殊に四年間余り滞在した西欧では、妻アンナの衣類を質に入れるまでして賭博に狂い、地獄に落ち込んだのでした。私の祖父も酒と賭け事で人生の歯車を大きく狂わせてしまい、その末には結核に罹り、惨めな死を迎えました。競馬で負け、酒に酔い、咯血をし、暴れる祖父を日々目の前にした私は、子供心に、生きてゆくことは大変なことだと身に沁みて感じさせられたのでした。「賭博熱」という、また「アル中」という、悪魔的「^{おとしあな}陥穽」。

人間の心に潜む「闇」の魔力と魅力。その根強く底知れぬ力に対して、それに抵抗すべき人間の意志は弱く、この悲劇と喜劇に対して手を差し伸べてくれる人たちや機関があるとしても数は少なく、傍らの人間にも殆ど何も出来ないのが現実です。

★政府や一部の地方自治体が、経済の活性化のためとの理由で、公的賭博場の開設を推進しています。私はこのことに心から怒りと危惧を覚えます。「自由」をはき違え悪用した、許されぬ醜悪な政策です。彼らは対策も考えていると言います。しかし薬を用意したからと言って、健康な人間に病原菌を吞ませる者が何処にいらっしゃるでしょうか。ここにあるのは「悪魔の陥穽」以外の何物でもありません。

(この項 了)

(B)「だって、私、彼氏が出来たんですよ！」

★大学入学後の半年ほど、熱心にドストエフスキイ研究会に出席し続けていたCさんが、パタッと出席をしなくなりました。例年通り、私は最初の半年ほどは、研究会の参加者にドストエフスキイ的思考に慣れて貰うため、やや緩いペースで『夏象冬記』の講読と討論を進めていました。しかしCさんは毎回、こちらの期待以上に周到な準備をした上で臨み、他のメンバーをリードしていたのです。

★突然顔をみせなくなったCさん。彼女を高く評価する仲間は心配して、連絡を取ってみようかと話し合っていました。しかし私は恐らく何か事情があることだろうし、もう暫くの間待つのがよいだろうとアドバイスをしました。

そうこうするうちに半年ほどが過ぎ、この年の研究会も最終回を迎えようとする頃のことです。私は中央線の車中で、全く偶然にCさんと出会ったのです。

「久しぶりですね。その後どうしていましたか？ 研究会も一年が終わるところで、皆、あなたのことを心配していますよ」

「エーッ、だって、私、彼氏が出来たんですよ！」

Cさんは嬉しそうに報告をしました。しかしCさんが見せた笑顔は、以前彼女が研究会で見せていた充実感の延長線上にあるものではなく、私に何か不自然なものを感じさせたのでした。「彼氏が出来た」喜びと共に、切り捨ててしまったものの重さ——恋愛の情熱の「落とし穴」に嵌まり、彼女の内では葛藤が繰り広げられていたのだらうと思います。しかし私は黙っていました。もし自分が「落とし穴」の内にいると感じたのならば、あとは誤魔化さずに自分と向き合い、自分で自分の道を選び取るしかない。私は人がそのような自由と責任の内に置かれていると考えるのです。「またドストエフスキイを読みたくなったら、何時でも来な

さい」、こう言って私は電車を降りました。それ以後、Cさんが研究会に顔を出すことはありませんでした。私の内に今も残る「辛い思い出」の一つです。

★恋愛とその情熱について、「落とし穴」などという言葉を持ち出して野暮なことを記すよりも、また「自由」とか「責任」などという理屈をこねるよりも、そして今更「辛い思い出」などと言って感傷的になるよりも、ここで改めて私は、恩師小出次雄先生の言葉の前に立ちたいと思います。結婚に当たり、「式」にあたるものは一切行わなかった妻と私に、先生は次のような言葉を贈って下さったのでした。

「家庭を、教会のように、聖なるものの前に立つ場とするのだ。

家庭を、大学のように、知の透徹した場とするのだ。

家庭を、町の広場のように、人々が自由に集える場とするのだ」

どれもが皆、実現は至難の業です。しかし我々二人は最期まで、師の言葉を忘れまいと思っています。そして若い人たちには、結婚式や披露宴への参加は遠慮させて頂く代わりに、この師の言葉を贈らせて頂くことにしています。押しつけは好みません。しかしこれを読む皆さんが師の言葉を知って頂き、自らの生を考える手掛かりとして頂ければ嬉しく思います。

(この項 了)

(C)「困るんです。こういうの、本当に困るんです！」

★ドストエフスキイ研究会ならではの「辛い思い出」を、もう一つ記しておきます。その際、このエピソードを理解して頂くために、改めてドストエフスキイ研究会の位置づけ、研究会に対する私の姿勢について、少し説明をしておきます。

★何度も記してきたことですが、ドストエフスキイ研究会とは、まずはドストエフスキイのテキストを丁寧に読み、またドストエフスキイ世界の根底にある聖書世界も出来るだけ誤魔化せずに理解するように努め、そこから人間と世界と歴史が抱える問題について、誤魔化しのない思索を試みることを目的としてきました。それだけドストエフスキイという人は聖書を熟読し、イエスという存在を凝視し、そこから真剣勝負の思索を展開したのです。ところが日本においては、この分野の殆ど全ての学者や評者が、ドストエフスキイにおけるキリスト教、殊に聖書の重要性を口にはするものの、実際には正面からの取り組みをしていないのが現実です。このテーマに^{こだわ}る私について、「彼は宗教の方に行ってしまった」と言う人がいました。またある会合の場では、私に面と向かって「今日は、あなたの宗教かぶれに引導を渡します」と宣言する、ドストエフスキイ論の著者もいました。

明治以来ドストエフスキイと彼が凝視するイエス理解について、我々日本人は相も変わらずの島国精神という「蛸壺」に嵌まり続けていると言うべきでしょう。今回取り上げている様々な「^{おとしあな}陥穽」の中でも、私にはこれが最も深刻で厄介なものに思われます。将来の若者たちにはこの怠惰さと偏狭さを克服してもらい、ドストエフスキイとイエスとが向き合う現場にどんどん出てゆき、そこで思索をして貰うべくドストエフスキイ研究会は続けられてきたのです。

★もう二十年ほど前のことです。新しい年度が始まって最初か二回目の研究会のことでした。ドストエフスキイの『夏象冬記』の講読と討論の作業が終わり、休憩の後、今度は新約聖書との取り組みに移ろうとした時のことです。私が各自持参した聖書を出すようにと言うと、突然一人の男子生徒が、慌てふためいて席から立ち上がりました。

「あの一、先生、あの一、済みません・・・」

何事が起ったのかと、私はこの青年を取り敢えず隣の部屋に導きました。すると彼は私の目を見つめ、必死で訴え始めたのです。

「あの一、こういうの、困るんです。

僕、ここに宗教に入ろうとして来たんじゃないんです。

困るんです。こういうの、本当に困るんです！」

隣のゼミ室の人たちに聞かれまいと声を潜め、この青年が語ってくれたことは、以下のようなことでした —— 自分は宗教には全く関心がない。大学では政治学と社会学を学ぶつもりだ。この研究会では、ドストエフスキイを通して 19 世紀ロシアの歴史が学べると思っていた。しかし聖書を読まされ、キリスト教まで学ばされるとは思っていなかった。「困るんです。こういうの、本当に困るんです！」。

★必死で訴える彼の顔には、自分が何か狂信的な宗教セクトに紛れ込んでしまったかのような、強い戸惑いと恐怖の表情さえ浮かんでいます。私も一瞬戸惑いました。しかし気を取り直し、上に記したような研究会の趣旨を改めて丁寧に説明し、聖書との取り組みの理由も語ってあげました。しかし話は全く通じず、ただ帰らせて欲しいと懇願する彼を、これ以上引き留める理由はありませんでした。

★そそくさと研究室を出てゆく青年を見送りながら、思いました —— これが正に明治以降の日本人の多くが、そしてドストエフスキイと取り組む学者や評者や読

者の多くが、キリスト教に対して、そして聖書に対して取ってきた姿勢そのものではないのか。そのあからさまな姿を、この真面目な青年は一瞬の内に、しかもこの上なく正直に演じて見せてくれたのだ——辛かったのは、この青年を落ち着かせ、再び机に向かわせる「力」が自分にはないことでした。

★皆さんは、第三回目に取り上げたS君のことを覚えておいででしょうか？ O君と共に「裁判員制度」と取り組むS君です（「予備校 graffiti」（三）⑫）。彼が市民運動に取り組む中で、パンフレットやポスターを持って訪れたお宅で示された表情、これによってS君は暫くの間、前進する気力を奪われてしまったのでした。東京郊外の住宅地、ここでS君が出会った表情とは、基本的にはドストエフスキイ研究会でこの真面目な青年が示した表情と、そして彼が発した言葉と、正にそのまま繋がるものだったのではないのでしょうか。「困るんです。こういうの、本当に困るんです！」—— 営々と築き上げてきた「城」に侵入してくる「異者」・「異物」。これに対して人々が示す本能的とも言える拒否反応。私はこれが、人間の誰もが内に宿す保守的で閉鎖的な小市民性であり、敢えて言えば、怠惰で頑固な島国根性の具体的表現であり、結局は「閉じた魂」が自ら好んで陥る「落とし穴」に他ならないと思うのです。

★二十年ほど前、足早に研究室を去った青年は、その後政治学あるいは社会学から、人間と世界とその歴史について様々なことを学んだに違いありません。これは決して皮肉ではありません。その知識を十分に持つに至った彼は、あの時の自分の反応が些か性急過ぎたことを、今では冷静に判断出来るのではないのでしょうか。もしそうであるならば、彼がこの「予備校 graffiti」を読んで、彼自らは「良し」と思うことを、一つの「落とし穴」であるとか「蝸壺」とまで言う私に、改めて正面から反論をすべく、或いは新たに「対話」をすべく、連絡をしてきてくれるといいのですが・・・今でも私は、それを心から願っています。

（この項 了）

（D）「お陰様で、30歳で1千万です！」

★今はまず殆ど見られなくなりましたが、河合塾で浪人生活を送った人たちが、大学の卒業にあたって再び河合塾を訪れ、新しい就職先について報告をするということが、80年代から90年代にかけて少なからず見られました。

今からすればこの現象は、バブルに極まる好景気に後押しをされ、就職の好結果を得た若者たちが、その満足感と幸福感を表現する一つの「儀式」だったように思われます。また昭和の末にはまだ日本社会が、昔ながらの「礼節」の名残を留めていたのだと言うことも出来るでしょう。いずれにせよ好奇心の強い私は、彼らとの

会話そのものは楽しみで、講師室や喫茶店で、彼らの大学での勉強のこと、恋愛のこと、感動した本のこと、そして海外旅行のことなどについて、様々に質問を浴びせたのでした。中でも一番好きだったことは、海外体験について語って貰うことでした。彼らの海外旅行や留学自体が、日本の経済繁栄によって可能となったバブリーな面もあるとはいえ、それでも彼らの話に耳を傾けていると、日本の若者の心が次第しだいに外に開かれ、豊かになりつつあること、その思考と行動が少しずつ島国精神を脱しつつあることを実感出来たのです。このことは私自身の心も広げてくれ、私も彼らと一緒に世界に飛翔してゆくような思いにさせられたのでした。

★ところが90年頃から、私はこれらの報告の中に「違和感」を覚えることが多くなりました ——（キリスト教最大の祝祭である）クリスマスに彼女をどう確保したかとか、どこのレストランやホテルでイヴをどうエンジョイしたかとか、サークルの卒業記念旅行は西海岸でイースターをどう楽しんだかとか、これらのことを実にあっけらかんと、楽しそうに報告する学生が多く現れるようになったのです。

海外旅行について、一流の美術館や大伽藍を訪れたというような、更には憧れの大学構内を歩いてきたというような、学生らしい報告は余り聞かれなくなりました。親が飛行機のエコノミー・クラスは利用させず、一流ホテルに滞在させてくれた、旅行に当たってクレジットカードを作ってくれたという類のことを嬉しそうに、また当然のことのよう報告する若者が増えてきたのです。仲間同士で「起業」をし、海外で買い付けた商品を私に売り込もうとする女子大生たちも現れました。バブルの大波が日本を、そして多くの若者たちを呑み込んでしまったのです。

このような流れの中で、大学はどうかと言えば、「教育」に向かう人たちの目と心は、専ら自分自身の研究か、マスコミ・ジャーナリズムに向けられ、アカデミズム空間は学生に読書と思索と研究を強く迫る場であることを殆ど止めてしまいました。バブルと共に、多くの大学がレジャー・ランド化を完成したのです。

★前置きが長くなりましたが、このような中、或る年の春です。講習中の私を訪れてくれた大学生が、満面に微笑みを浮かべ、次のような報告をしてくれました。

「先生、お陰様で、このたび××大学の法学部を卒業することになりました。

就職先は、お陰様で、××銀行に決まりました。

お陰様で、30歳で1千万です！」

四年間も会わなかった私に対して繰り返される「お陰様で」。これが私を不快にさせました。バブルのぬるま湯に浸かり、満足し切った若者の報告でしかないではないか！——ところが私が返した言葉は、「よかったね、頑張れ！」だったのでした。

「激励」を受けた彼は、満足気に帰ってゆきました。この青年をバブルのぬるま湯という「落とし穴」から引っ張り出し、冷水を浴びせることをせず、愛想よく祝福をし、激励をして帰ってしまった「後味の悪さ」。私は自分の「社交性」に苛立ち、「教育者」としての失格を自覚し、一層不愉快になりました。「辛い思い出」「後味の悪さ」はこの場合、エリート青年に対するというよりは、自分自身に対する嫌悪感なのです。

★それから数日後のことです。何と同じ大学の同じ学部の卒業生が（いわゆる「名門大学」の「名門学部」です）、同じ校舎に私を訪れ、ほぼ同じ報告をするということが起こったのです。先の青年との違いは「××銀行」が「××商事」に変わっただけで、「30歳で1千万」という数字までもが同じでした。（この時「お陰様で」が繰り返されたかどうかは覚えていません）。先の××銀行の青年がもう一度、私を試みるために遣わされて来たのだ——私は座り直し、身構え、口を開きました。

「僕には、30歳で1千万という言葉は嬉しくありません。君がもし、日本の経済・貿易・金融が抱える問題を自分の解くべき課題として××商事に入り、そこを舞台にして問題の解決に命を賭け、日本ばかりか世界の経済・貿易・金融にも革命を起こそうというのなら、30歳で1千万など端金はしたがねだとして斥け、遠慮せず、その百倍でも要求してやりなさい。大志を抱いて社会に出て欲しい。若者に小さくまとまって欲しくない！」

★きっとこの時、私の言葉は縫もつれて滑りまくり、実際にはこの通りに言えなかったに違いありません。しかしこの若者は、浪人時代は柔らかであった私の口調に、少なからぬ苛立ちが含まれているのを感じ取ったのでしょうか、暫くの間、怪訝そうに私の顔を見つめていました。しかし私は、四年ぶりにわざわざ挨拶に来てくれたこの若者に、そして幸福感で一杯のこの新社会人に、これ以上切り込むことは出来ませんでした。結局私の言葉を「激励」と受け取った彼は、感謝をして、しかし十分には満たされない表情のまま帰ってゆきました。私には中途半端さの思いと、先の青年の場合よりも更に「後味の悪さ」と「辛い思い出」が残されたのでした。ドストエフスキイの『夏象冬記』を通して、あれほどバブル日本に厳しい目を向けていたはずの私が、このような具体的な生の場では、あの若者が選んだ中流生活という「落とし穴」、その儚はかなさと危険性を自覚させることさえ出来なかったのです。

バブルに呑み込まれた日本。その崩壊の後に果たして何が残し、そして何が生まれたのか？——今も私はバブルについて、そしてその「光と闇」について、それを自分自身の「辛い思い出」「後味の悪さ」と重ね、考え続けています。

（この項 了）

(E)「僕、一応、ドストは制覇しました」

★三十年以上前のことです。予備校に私を訪ねて来た大学生がいました。この青年が某私立大学の文学部に属し、ドストエフスキイについて話がしたいと直接私を訪ねてくれたことは覚えていますが、誰の紹介だったのか、どのように私のことを知ったのか、思い出せません。名前も記憶から消えてしまいました。しかし彼と交わした会話の中身とその前後の状況だけは、なぜか今も鮮明です。

★この青年は、浪人生の私への質問が続く間、講師室の入り口近くで、口を固く結んだまま、じっとこちらを見据え、直立の姿勢で待っているのです。「硬派の、個性的な子のような」—— 私はこう思ったことを覚えています。

予備校での仕事が全て終わり、外の喫茶店で話が始められました。簡単な自己紹介を終えると、早速彼は私の度肝を抜いたのです。

「僕、一応、ドストは制覇しました。 [ドスト＝ドストエフスキイ]

トルストイも一応、大丈夫です。

このあと何を読んだらよいのか、お聞きしたくて来ました」

私はこのような青年が大好きです。若者に必要なのは、このような思い切り高飛車な姿勢であり、気概です。ドストエフスキイを「一応、制覇」したと、驚くべきことを口にし、そればかりかトルストイをも「一応、大丈夫」とまで言う青年はまずいません。「やはり、掘り出し物だ!」。好奇心と共に、私は身を乗り出しました。

★ところが暫くして、「一応」と「制覇」と「大丈夫」という言葉の内実が明らかになりました。この青年は、ドストエフスキイとトルストイの主要な作品は、文庫本にある限り、「一応」全て読了をしたものの、まだ一度でしかありませんでした。またそれらの内容の把握も完全な「制覇」「大丈夫」とは遠く、そのことが気になると共に、他のロシア作家たちの作品も読まねばと思い、強い焦燥感に追い立てられていたのです。彼は初対面への緊張と気負いから、「制覇」とか「大丈夫」という言葉を使ってしまったことを、「虚偽威かし」として強く恥じるのです。「僕、田舎者なんで・・・」。彼は最後に、こうポツンと言いました。

★明らかとなった現実。しかし私は失望などしませんでした。たとえ文庫本でも、ドストエフスキイとトルストイの全作品を読むこと自体、そう簡単に出来ることではありません。焦燥感も真面目さゆえのこと。自らを「田舎者」だと恥じる謙虚さと朴訥さも、私は気に入りました。私自身も、自分を田舎者だと思うからです。

★私は言いました —— 「虚仮威かし」をするくらいの高飛車な姿勢をとるのが青年であり、「傲慢」という「落とし穴」に嵌まり込むのが若さの特権なのだ。そんなことを気にすることはない。それよりも君が今捕われている焦燥感について考えよう！

ゆくゆくは広く哲学・思想を学びたいと言うこの青年に、私が与えたアドバイスは以下のようなものです。(これらは皆、日頃私が研究会のメンバーに力説していることであり、ドストエフスキ研究会の核心の一つなので、参考のために記しておきます)

君が取るべき道は、将来哲学・思想の分野で本質的思索が出来るよう、その土台・素材をまず確保することだ。そのためにはドストエフスキとトルストイとを何度も何度も読み返し、この二大作家の世界に習熟するとよい。哲学者のヴィトゲンシュタインは『カラマーゾフの兄弟』を49回読んだと言われるように、ロシア文学、殊にドストエフスキとトルストイは、我々に思索の素材を提供してくれる宝庫なのだ。まずはこれら二人の世界に習熟することで十分だと思うが、君が欲するならば、更に読書対象をプーシキンやゴーゴリやツルゲーネフ等の他の作家たちに広げるのもよいだろう。「傲慢」ということ以外に、若者が持つ特権とは「時間」をたっぷりと与えられていることなのだから、可能ならば大学院に進み、その上で留学もして、三十代まではゆっくりと読書と思索に励み、将来への土台作りをしてしまうことだ。私は恩師から、「60歳まではひたすら基礎的な勉強に励むのだ。その蓄積の上に、本当の思索は60歳になってから始まるのだ」、このように常に言われていた。60歳まで、君にはまだまだたっぷり時間があるではないか！

★「やってみます！ 有難うございました！」。青年は大きな声で言い、一礼をして帰ってゆきました。その後彼からの連絡はありません。しかしあれからまだ30年。彼が60歳になるまでには、まだ10年近くがあるでしょう。彼がどのような努力を重ね、その上でどのような思索を繰り広げているのか —— 私は彼のことを「姿なき弟子」と勝手に名づけ、その成長を心から楽しみにしています。「虚仮威かし」と自らも認めた高飛車な傲慢さ、その生命力をエネルギー源として、そして「田舎者」と自らを呼ぶ謙虚さと朴訥さを土台として、彼は大成するでしょう。

★数年後、研究会に同じような青年が現れました。

「ニーチェは大体知っています」

「ニーチェからドストエフスキを少し見てみたいと思います」

ニーチェの読書体験を基に、彼もまた青春の傲慢、「倨傲の精神」に捕らわれるという「落とし穴」に嵌まっていたのです。

ニーチェの作品とは、ひとたび波長が合うと次から次へと面白いように読書が進み、読者はその高揚感の中で、彼の思想の全てを理解してしまったような錯覚に落ち込み、ニーチェ独自の高飛車な物言いを真似さえし始めます。ここにニーチェの魅力と^{おそろ}懼しさがあると言えるでしょう。ギリシャ世界とキリスト教世界、そして西洋哲学の世界に関して、この哲学者が持つ理解の深さと思索の奥行きは底知れず、「ニーチェは大体知っています」という主観的な高揚感と、真の意味でのニーチェ理解との間にある距離は、測り知れないものがあるのです。彼はこの^{ハイ・テンション}高揚感の下に、今度はニーチェが「自分の人生の唯一の師」だとするドストエフスキをも「少し見てみたい」、つまりは「制覇」したいとして研究会の門を叩いたのでしょう。

★「一応」「制覇」「大丈夫」、そして「大体知っている」「少し見てみたい」——これらの言葉の幼稚で滑稽な誤用。そしてこのことに気づかぬ気負い。つまりは青春の「落とし穴」たる「倨傲の精神」——繰り返しますが、これらのことを過度に恥じることはありません。その「落とし穴」に嵌まり込んでいる自分、傲慢になり気負って高飛車な姿勢で他人を威圧しようとしている自分と、その自分の未熟さと滑稽さに気づくかどうか、これが問題なのです。ひとたび気づいたら、その先自分が歩むべき長い道に、謙虚に一步を踏み出せばよいのです。

★残念ながらこの青年は、私の話に耳を傾けてくれませんでした。殊に私が、ニーチェが如何に深くキリスト教を知り、生涯にわたりイエスという存在を如何に大きな課題としていたかを語っても、そしてまた同じことがニーチェの「師」ドストエフスキについても言えることを説明しても、真剣に聞いてくれようとはしませんでした。彼もまたキリスト教と聖書に対して、多くの日本人が取り続けてきた島国的狭小さと頑迷さから自由ではなく、キリスト教と聖書については、自分とは関係のない世界だとして遠くに追いやってしまっていたのです。

研究会の終了した混乱の中、気づくと彼の姿はありませんでした。この青年について私に残されたのは、残念ながら、「後味の悪さ」と「辛い思い出」のみです。

★フランスの哲学者ベルクソンは、ドン・キホーテが道を歩いていて「穴」に落ちたとしても、我々は笑ってはならないと言います。なぜならば、ベルクソンによれば、ドン・キホーテは「星」を見つめて歩く騎士だからです。

「傲慢」という青春の「落とし穴」に若者が落ち込むこと——何度も記したように、このことは青春の特権です。しかし若者がその「落とし穴」の底から、如何なる「高み」・「星」を見つめるかということ、これが問題なのです。（この項了）

予備校 graffiti ㉑

ー クリスマス、I 君が「暗唱」したもの ー

★暗記・暗唱が知識を確実に身につけ、頭脳を活性化させるために如何に大切であるか、このことを私は繰り返し記してきました。I 君も予備校での一年間、暗記・暗唱を見事に貫いたのですが、彼の場合は一味違った暗記・暗唱でした。

★好奇心と探求心の塊のような I 君は、「悪戯小僧」の雰囲気^{いたずら}を強く漂わせながら、何か面白いことはないかと、いつも両目を輝かせ、クリクリと動かしているのです。一昔前まで都立高校の出身者に多くみられたタイプで、せっかく(?) 浪人をしたのだから、この機会に世界文学の最高峰と聞く『カラマーゾフの兄弟』にもアタックしてしまえと思い立ち、予備校の授業が始まる前に、この大作を読破してしまうような若者なのです。一学期、授業後の暗唱のチェックが終わると、何かにつけ私に様々な質問を浴びせてくる彼は、私がドストエフスキイのキリスト教思想を研究していると知るや、今度はその分野で何か暗記をさせてくれと迫ってきました。

暫く考え、私が選んだのはヨハネ福音書冒頭の「言葉讃歌」^{ロゴス}でした。

「太初に言葉あり、言葉は神と偕にあり、言葉は神なりき」(ヨハネー 1)

In the beginning was the Word, and the Word was with God, and
the Word was God. (JOHN I-1) // 日本聖書協会、A.S.V.

ここから始まる「言葉讃歌」(1-19) は、キリスト教の精髓^{エッセンス}が見事な韻文で表現されていて、内容的にも英語の暗唱用副読本としても、最適と思われたのです。これを I 君は、夏の間の一学期のテキストと共に、完全に暗記・暗唱してしまいました。

★「先生、次は何でしょうか？」—— 二学期、新たに迫られ私が選んだのは、新約聖書の中で、恐らく人々に最もよく知られ、また愛される「山上の垂訓」の一部でした(マタイ福音書五 1-11)。「山上の垂訓」とはイエスが山上で人々に向かい、自らの考えを端的かつ平明に説き明かしたもので、思想・宗教に強い関心を示す I 君には、キリスト教を具体的に知る上で格好の個所と思われたのです。

「幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。」

幸福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。・・・」(マタイー 1-2)

Blessed are the poor in spirit : for theirs is the kingdom of heaven.

Blessed are they that mourn : for they shall be comforted. . . .

受験勉強が峠に差し掛かり、次々と模試も行われ、教室が独特の緊張感に包まれてくる二学期。I 君は成績を順調に伸ばすと共に、いつもの英語テキストと、このイエスの「山上の垂訓」の暗記・暗唱も完全にやってのけたのでした。

★12月が来てクリスマスが近づきました。キリスト教最大の祝祭日とは対照的に、予備校には殺気立った空気が流れ出す頃、またもI君が迫ってきました。「先生、三度目の暗記・暗唱をお願いします!」。この時期、プレッシャーで目が変に座ってしまう生徒さんも多い中、相変わらず「悪戯小僧」の目はくりくりと動き、輝いています。私が選んだのは、『夏象冬記』(1863)から『罪と罰』(1867)を経て『カラマーゾフの兄弟』(1880)に至るまで、ドストエフスキイが一貫して作品の根底に据えたヨハネ福音書の「ラザロの復活」(十一1-46)でした。

死んで既に四日、墓の中で死臭を放つラザロを、イエスが再び生に起ち上がらせる奇跡。これを「眉唾物」「噴飯物」の作り話として斥けるか、或いはここに死を超えた「永遠の生命」のリアリティを読み取るか——「ラザロの復活」とはキリスト教の理解においても、ドストエフスキイにおける「神と不死」の問題の理解においても、正に「鍵」としてあり、クリスマスに格好の暗唱テーマと思われました。

「ラザロよ、出で来^いたれ」(十一43)

Lazarus, come force.

このイエスの呼び声に応え、ラザロは墓から起ち上がります。12月25日のクリスマスの夜、授業とその後の質問が全て終わり、伽藍^{がらん}とした予備校の講師室で、I君は46節にのぼる長大なラザロ復活物語を見事に暗唱し切ったのです。

★I君はその後15年間、私の許でドストエフスキイと聖書を学びつつ、最高学府で宗教学の博士号も取得し、三十代半ばになった今も「悪戯小僧」の目を輝かせながら、生涯の専門として選んだ一休禅師の研究に打ち込んでいます。彼は従来のアカデミズムの狭い枠を打ち破り、やがて画期的な一休論を書き上げ、日本の宗教史・思想史に新しい一步を刻むに違いありません。彼が人生の出発点でやり遂げた、三度の聖書の暗記・暗唱について振り返る時、私はそこに彼に呼びかけ、彼を招く何ものかの声が一貫して響いていたことを感じざるを得ません。彼の暗唱とは、その呼び声に向かっての応答だったように思われます。この「呼び声」と「応答」については、やがて彼自らが思索を重ねる中で明らかにし、聖書三カ所の意味についての解釈と共に、その一休論の内に記してくれることでしょう。(この項了)

予備校 graffiti ②

Hさん、無限の情熱と生命力の向かうところ

★Hさんは、今紹介したI君と並走する形で、予備校からドストエフスキイ研究会、そして最高学府の大学院での研究まで、二十代をドストエフスキイと聖書の勉強に賭けたのでした。このHさんの二十代は、I君のそれと同じく、様々なドラマに満ちていて、それら全てを限られた紙面で紹介することは至難の業です。I君の場合は、彼の浪人時代に的を絞り、人生の出発点となった聖書三カ所の暗記・暗唱に専ら焦点を当てました。Hさんの場合は、私が頂いたレポート・論文を基に、彼女が自らの内に見出した「闇」と、そこから「光」を求めて歩んだ大学時代の足跡を追ってみたいと思います。今回冒頭で三部に分けて追ったK君、そしてI君、更に最後のHさん。これら長・短異なる報告は全て、私が出会った青春を如何に切り取り、書き留めるかについての、様々な試行錯誤の結果と考えて頂ければと思います。

★ドストエフスキイ研究会では毎年『夏象冬記』を講読していたことは、何度も記しました。今回の冒頭K君の項では、この作品を河合文教研のエンリッチ連続講座で取り上げたことも記しました。西欧の文明社会に対するドストエフスキイの痛烈で根底的な批判は、西欧文明を採り入れ近代化を推し進めた日本への批判としてもそのまま読み得るものであり、私は二十歳前後の若者たちがこの作品と一年間取り組むことで、自らの生について振り返る大きな手掛かりとなるだろうと考えたのです。Hさんはこの作品を、自らの問題として、正面から受け止めてくれたのでした。

★一年間の勉強の終わり、Hさんは「私の『夏象冬記』」と題したレポートを提出してくれました。大学への入学後、自らが選んだ人文科学の世界が、果たして「人間の未来に繋がるものか」と疑問を抱き始めていた彼女にとって、この研究会の一年がどのような意味を持つことになったのか、彼女はこう記しています。

「ドストエフスキイの夏象冬記は、現代社会の人間の活動においても言えることを鋭く指摘していて、それは私への指摘であり、ドストエフスキイからの問いかけであった」

「この勉強会において人生で初めて人間の精神世界に触れた。私は勉強会でみんなと議論しながら、「人間がどうあるべきか」とか「真理」とか、定義がうまくできないようなものを考えているとき、いつもドキドキしてワクワクして『なんて exciting なんだろう!!』と思い、幸せにさえ感じた」

やや舌足らずですが、ドストエフスキイとの出会いの、真摯な報告です。

★二十歳の誕生日を迎えた直後、『夏象冬記』に続いてHさんは『カラマーゾフの兄弟』と取り組みます。ドストエフスキイの後期作品群の出発点から、一気に彼の文学の総決算たるカラマーゾフの世界へ。この大胆な足取りは、Hさんによれば、『夏象冬記』との取り組みから生まれた必然の歩みでした。数年後彼女は、『カラマーゾフの兄弟』を扱った卒論の前書きで、こう振り返っています。

「ドストエフスキイが近代文明に向けた批判のまなざしが、私自身の生を突き刺し、確かなアイデンティティを喪失させると共に、闇へと放り込んでしまったのである」

『夏象冬記』に関する先の素朴な感想が、ここでは深く自覚化され、簡潔で鋭い言葉に煮詰められています。『夏象冬記』との出会いが、「アイデンティティ喪失」の体験として、また自らの生きる「闇」との出会いとして、言い換えれば新たな「光」の探求の始まりとして、的確に総括されるに至ったのです。

★「私の夏象冬記」に戻りましょう。注目すべきことは、ここで既にHさんが、自らの「カラマーゾフ体験」について記していることです。初めての『カラマーゾフの兄弟』との取り組みとは、Hさんにとって、「闇」を切り裂く強烈な「光」の体験だったのです——「ロシアの修道僧」と題された第六篇を読了するや、Hさんが胸の高鳴りと共に襲われたのは、「愛」と呼ぶしかない激しい感動体験でした。しかかしこの激しい超越的体験、「カラマーゾフ体験」の明晰な言語化の試みを、この時彼女は、二十歳という若さもあって、十分に成し遂げることが出来ませんでした。かくしてHさんの大学生活はその後、『カラマーゾフの兄弟』の緻密な読解の作業と、作品の土台をなす聖書との取り組みに捧げられたのです。

★数年後、Hさんは卒業論文で、かつて第六篇の「ロシアの修道僧」から与えられた感動、「愛」と呼ぶしかない感動体験について、改めて正面から取り組みます。彼女が分析の対象としたのは、「ロシアの修道僧」に続く第七篇、主人公アリョーシャの一連の回心体験でした。数年前の「ドストエフスキイ」体験の明確な言語化のため、ドストエフスキイが提示する「闇」を超えた「光」を掴むため、そして「自分自身の魂の変革」への願いも込めて、この作業は続けられたのです。

「今回『カラマーゾフの兄弟』を最終的にテーマとして選んだのは、自分

の感動の理由を改めて問い、闇に対する答として、ドストエフスキイが描いた光を明らかにしたいという問題意識に拠る。アリョーシャの確固としたアイデンティティー確立のドラマの中に、自分自身の魂の変革への希望に思いを馳せ、論文に取り組んできたことを、ここに記しておく」

『夏象冬記』と出会ってからの自らの精神史が、アリョーシャの「アイデンティティー確立のドラマ」と重ねられ、ここに確かな言語化がなされたのです。

★アリョーシャの回心体験 —— 「初恋にも似た」熱烈な信と愛を捧げた師ゾシマ長老の死にあたり、「聖者」がもたらすであろう輝かしい奇跡を待ち望んでいたアリョーシャ。しかし彼を待っていたのは、余りにも早く師の死体から発せられた、余りにも強烈な腐臭でした。僧院と町の全てを巻き込んだ「聖者の失墜」劇。この大醜聞の中、深い絶望と懐疑の底に沈んだ青年が、そこから如何に救い上げられ、如何に新たな信仰の「戦士」となって立ち上がったか、そのドラマが詳細に描かれるのが「アリョーシャ」と題された第七篇です。Hさんは「自分自身の魂の変革への希望」と重ね、このドラマを丁寧に辿り、分析を試みたのです。二十代半ばの若者がこのアリョーシャの回心体験を、テキストの緻密な分析と、聖書との熱心な取り組みと、そして深い宗教的感性とによって、かくも的確に捉え言語化した例を、私は他に知りません。

★その後Hさんは大学院への進学に当たり、ゴッホの『星月夜（糸杉と村）』について論文を書き上げます。ゴッホの強烈な色彩と形象世界の底には、聖書世界への没入と、殊にイエス・キリストへの感動が潜む点で、ドストエフスキイ世界と強く通じ合うものがあるのですが、Hさんは、ゴッホが描いた様々な「糸杉」におけるイエス像について、それらを可能な限り多角的な視点から分析し、考察を加え、『星月夜』論に凝集させたのです。

「狂気として片付けてしまうにはあまりにも調和の取れた色彩の世界。まるで音楽のシンフォニー、オーケストラさえ聴こえてきそうなこの星空は歓喜に満ちているようでもあり、以前ドストエフスキイの『カラマーゾフの兄弟』に取り組んでいた時に扱った、第七篇第四章ガリラヤのカナで主人公アリョーシャに降り注ぐ星空にも似ていて、「星空」というテーマに何か運命的なものも感じ、(略)、《星月夜》を今回の研究テーマとして取り組むことに決めた・・・」

ここからはHさんの思索が、『夏象冬記』から『カラマーゾフの兄弟』、そして

聖書との取り組みを経て、それまでの宗教的世界から、更に芸術世界をも含む思索にまで広がったことがよく伝わってきます。この論文には大学で高い評価が与えられたと聞きます。大学ばかりか、広くドストエフスキイや聖書研究の分野でも、満天の星空の下でのアリョーシヤの神体験をゴッホの『星月夜』と重ね、更にはそこに十字架に向かうイエスを見るという視点は、今までにないユニークな試みとして高く評価されるべきものでしょう。

★ところで大学院の修士課程を終えたHさんは、博士課程への進学後、間もなく大学を去ってしまいます。具体的な詳細は不明ですが、ゴッホとの、またドストエフスキイとの取り組みにおいては、イエス・キリストと神存在の問題の考察が不可欠だとするHさんの姿勢が十分に理解されず、彼女はそこに長居をする必要を感じなかったのではないのでしょうか。私は現在のアカデミズムの狭小と貧困とが彼女に見抜かれ、切り捨てられたのだと思っています。

★現在Hさんは、或る放送局のディレクターとして美術関係の仕事に携わり、将来改めて正面からゴッホと取り組むことを念頭に置き、着々と力を蓄えているところです。結婚をしてお子さんにも恵まれた彼女は、仕事と家庭を両立させつつ、ドストエフスキイとイエスを踏まえ、ゴッホと取り組むという、この上なく取り組み甲斐のあるライフ・ワークを持つに至ったのです。

★しかし生涯にわたる課題が定まり、それへの準備態勢も整ったとは言え、Hさんが歩むべき道のりはなお恐ろしいほど長く、そこに待つ試練も厳しいものとなることは避けられないでしょう。今彼女が身を置く放送ジャーナリズムの世界の華やかさも、一歩間違えば、ゴッホの世界とは正反対の軽薄さに堕しかねない危うさを持っています。無限の情熱と生命力を宿すHさんには、是非それらの障壁を力強く乗り越え、夢を大きく叶えてくれることを願っています。

(この項 了)

予備校 graffiti・㉒-㉔・余録

★今回はK君についての報告に、通常以上の大きなスペースを割きました。ここに取り上げる人たちは誰もが皆、K君と同じスペースを用いて紹介すべき人たちです。しかし誰をも皆、一様に扱えばよいのかというと、これも疑問なのです。今回K君・I君・Hさんの扱いが、長・短の違いも入れて、様々な形になったのは、Hさんの項の最初に記したように、私が出会った青春を、そしてそこに見出したユニークな個性を如何に切り取り、そして如何に書き留めるかについての、長い試行錯誤の結果なのです。ここから今回の「予備校 graffiti」を味わって頂ければと思います。

ここに取り上げ切れなかった人たちも、まだまだ数多くいます。私はそれら若者たちの成長史を皆、可能な限り記しておきたいのですが、与えられた時間もエネルギーもこの辺が限界であり、次回で「予備校 graffiti」は一応終了とさせて頂き、再びドストエフスキイとの取り組みに戻りたいと思います。

★今年（2019）、国立ハンセン病資料館（東京東村山）では、「生きるため、描き続けた。」というタイトルの下、九州熊本のハンセン病療養所・菊池恵楓園・金陽会に属する患者さんたちの作品を集めた絵画展が開かれました（4/27-7/31）。東京では初めての試みでしたが、熊本地裁におけるハンセン病家族国家賠償訴訟の判決もあり、多数の人々が来館したのでした。去年この資料館の学芸員に就任したK君も、この絵画展に力を注いだ一人だったのですが、K君は訪れた私に、ここに展示された絵画は全て、社会から孤絶させられ、肉体的・精神的苦しみの底に突き落とされた魂が、そこで如何なる「光」と「美」に触れたかを証するものであることを、目を輝かせながら語ってくれたのでした。大江満雄に導かれ、辛い重荷を負わされた「癪者」^{らいしや}が、実は未来からの「来者」であることを、その詩作から知らされたK君は、今や「癪者」が描く絵画もまた、「来者」がもたらす「光」と「美」の世界に他ならないことを確信し、伝えてくれたのです。「来者」がもたらす芸術——これが今後日本の芸術と精神の世界に、新たな意味を持って確実に登場することを告げる絵画展でした。

この絵画展には、今回紹介したI君とHさんも訪れてくれました。研究会で二人はK君より年代的にひと回り後輩ですが、このK君とI君やHさん、そして研究会の他のメンバーたちが世代を超えて、やがてドストエフスキイを介して始めるであろう新たな「対話」、あるいは「旅」について、何時の日か皆さんに報告の出来る時が来るとすれば、私にとってこれ以上の喜びはありません。

★今回は人間が宿す「悪魔性」ということにしばしば言及をしました。K君の場合は「ハンセン病」に対する偏見と差別意識について、D君の場合は「学歴」を巡る差別意識について、また「キリスト教」や「聖書」に対する閉鎖的で狭小な島国精神について、そして自覚と反省のない青春の「傲慢」について等々・・・改めて人間誰もが内に宿す、厄介な「悪魔性」の存在を思わざるを得ません。

これらの中でも、私が最も小市民的で島国的な閉鎖性を感じさせられてきたのは、余りにも多くの人たちがキリスト教に対して、そしてドストエフスキイと彼が「命」とするイエス・キリストに対して示し続ける頑迷な無関心さです。ドストエフスキイ研究会で、聖書の勉強に取り掛かろうとした時、私に向かって「困るんです。そういうの、本当に困るんです！」と必死に訴えた大学生。真面目この

上ないこの若者が示した反応こそ、日本人がキリスト教に対して示してきた、そして今もなお示し続ける偏見と島国精神の、敢えて言えば、極限までカリカチュア化された姿ではないでしょうか。

★この小市民的で島国的な、滑稽とも言えるほどに頑迷な閉鎖性を、ドストエフスキイ世界の中に置いて見る時、また彼が根を置く聖書世界にも重ねて見る時、我々の前に浮かび上がってくるものとは何であるのか？ —— ここで一度、この島国的閉鎖性を言葉にすることを試みておきたいと思います。

私はそれが、人間誰もが内に宿す「聖なるもの」を斥け、ひいては抹消してしまおうとする小市民性だと思っています。これを具体的に聖書世界で言えば、イエスを十字架上に追いやり、磔殺させてしまったユダ的精神と呼ぶべきものでしょう。周知のようにシベリアでドストエフスキイは、イエス・キリストについて記したのでした。「キリストよりも美しく、深く、心を引きつけ、理性的で、男性的で、そして完全なものは何もない」(フォンヴィーゲン宛の手紙、1854)。この認識と姿勢は、遺作『カラマゾフの兄弟』(1880)に至るまで一貫したものです。ところがドストエフスキイを愛し、ドストエフスキイについて熱烈に論じる人々の大部分が、ドストエフスキイがイエス・キリストのことをこれほどまで熱烈に称讃し、「命」とし続けたという事実を知らず、そのイエス・キリストには目を向けようとしないのです。ここにあるのは、我々人間の内に深く根を張る頑迷な小市民性であり、自らの内なる「聖なるもの」を斥ける「ユダ的悪魔性」と呼ぶ他ないものだと思います。私にはこの頑迷かつ怠惰な島国精神を指して、ドストエフスキイ世界の登場人物たちの誰かが、苦笑いをしながら眩つばやいているように思えてなりません —— 「困るんです。そういうの、本当に困るんです！」

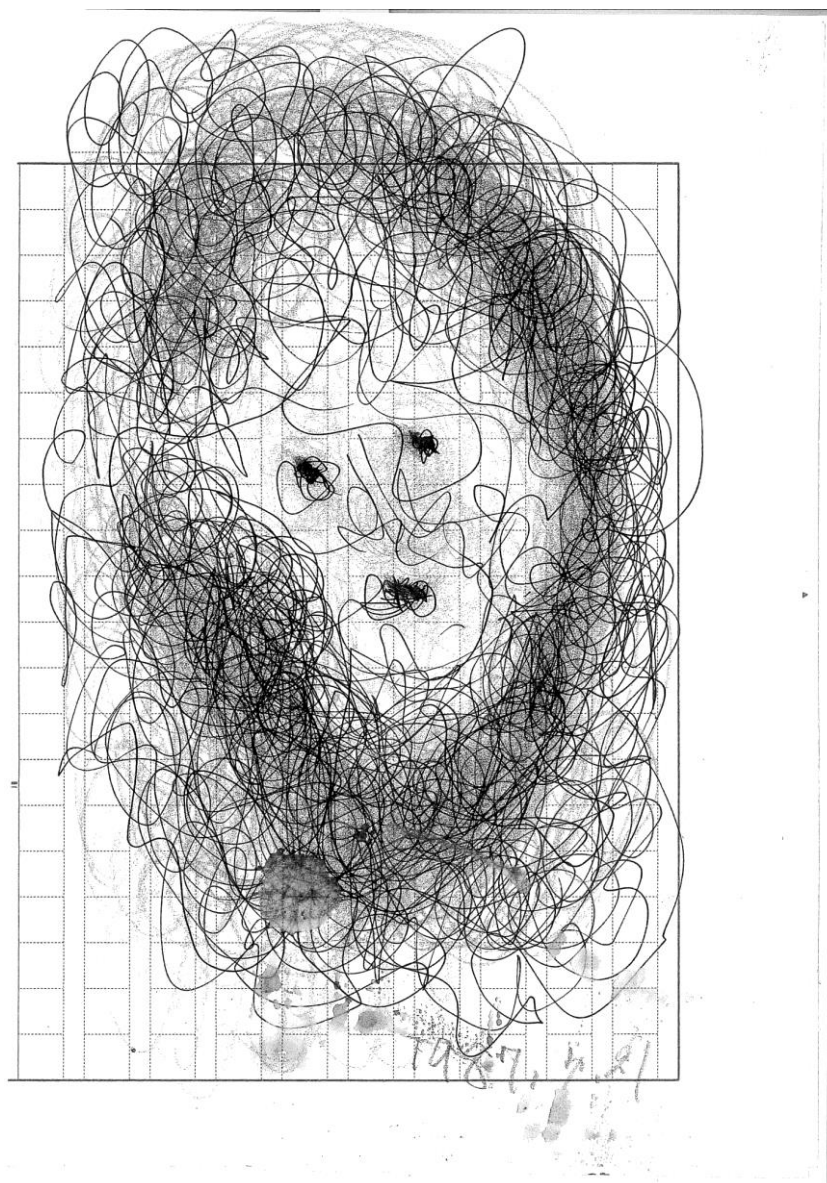
★今回は上の「悪魔性」ということに加え、「辛い思い出」というタイトルの下に、様々な「落とし穴」に嵌まった若者たちのことも記しました。彼らについて記しつつ、私はその「落とし穴」から彼らを引っ張り出せなかった自分の無力さと無責任とを改めて痛感させられ、少なからぬ憂鬱に捕われたのでした。しかしそれと同時に私は、人間が落ち込む「落とし穴」や「闇」の一方で、「光」が存在することを感じていたことも事実です。例えば今回紹介したI君の場合、彼の予備校での一年間とは、「悪戯小僧」が発する輝かしい「光」そのものであり、そしてK君にせよHさんにせよ、二人はそれぞれの「闇」と直面しつつも、それを超える「光」を懸命に求め、そしてその末に出会った「光」を力強く証してくれているのです。「辛い思い出」という「落とし穴」に嵌まり込んだままでいること、そのこと自体が思考停止なのであり、自らの怠惰さを証するだけだと考えるべきなのでしょう。

★次回「予備校 graffiti」の最終回は、今回とは逆に、今も私の内に「痛快な思い出」、或いは「楽しい思い出」として残る若者たちを紹介したいと思います。決して人間と世界と歴史を覆う深い「闇」を忘れ去り、今回の「辛い思い出」も「後味の悪さ」も遠く棄て去り、能天気な「光」の讃美で終わろうというわけではありません。「光」が強まれば強まるほど、「闇」は深まる。逆に「闇」が深まれば深まるほど、「光」は輝きを増す —— このドストエフスキイが示す「光と闇」の弁証法を改めて確認し直し、「闇」に対する「光」への展望と共に、この連載を終わりたいと思うのです。

(この項 了)

予備校 graffiti・もう一つの青春・⑤

小出次雄 画



[今回のデッサンには「1987、5、21」と明記されています。先生が亡くなれる（1989、9、25）二年少し前の作品ですが、描かれた対象が「青春」の内にある存在なのか、「幼な子」なのか判定は困難です。そのどちらにせよ、今回扱った人間の「悪魔性」を向こうに置いて見る時、ここには「永遠の青春」とも「永遠の童心」とも言い得る「美」が見事に描き取られていて、人間の「光と闇」について考える一つの手掛かりとなるのではないのでしょうか。]